

# 熊本式花菖蒲陳列に見られる鉢作法

— selfless manner —

夢 勝見

これまで多くの者により、わが国の古典園芸の特徴について種々の指摘がなされている。筆者は島国性(Insularity)がそのキーワードではないかと思っているが、今回は熊本という一地方都市で発達した鉢作法を紹介することによって、日本園芸の精神性について紹介したい。

## 〔熊本花菖蒲の成立〕

天保年間、肥後藩主細川斉護侯が江戸の松平菖翁(花菖蒲改良の中興の祖といわれる旗本、松平定朝)より、花菖蒲苗の分譲を受けて、これを城下にあつた花連(庶民の愛好団体)に栽培を委ねて以来、熊本地方で独特の発達をし、熊本花菖蒲と呼ばれる高度に発達した品種群を作り出した。その花連は、後に「満月会」と改め「親子兄弟」と雖も会員外のひとには一苗たりとも分与することは出来ぬ。」という厳しい規則をつくり、花菖蒲の品種改良に

努めると共に、その品種は他人の手には渡らずに今日に至っている。とはいえ、この禁が一度だけ破られたことがあり、その流失した品種がやがて全国に広まり一般愛好家の手に入るようになったものが、今日、肥後花菖蒲と呼ばれる系統である。

## 〔鉢栽培の歴史〕

熊本への導入当時は花壇植えとし、花時には油障子をかけて観賞したものだといわれているが、花時が梅雨にかかってしまい雨覆いが困難であること、油障子下では日光不足となり花色が失われたり痛みを生じたりすることが問題であつた。そこで、嘉永年間の頃、花連では口径一尺二寸の薬引丸鉢に植付けて試作することにした。秋の彼岸に一鉢三茎植付けて栽培したところ意外に成績がよかつた。この方法は花時に部屋に入れて観賞する上でも非常に便利で、花壇植えのように花の痛みむことも少なく、趣味の上からも面白

いということでの栽培法が広まつた。その後、大鉢では重過ぎるということで、小岱焼の一尺鉢に二茎宛植えすることが明治九年まで行われた。ところが、明治十年の西南戦争で多くの会員は家を失い、復興後は以前より住宅も狭く、また大鉢は高価であることから、明治十四年頃からは八寸鉢が専ら用いられるようになった。この花菖蒲専用として用いられたものは八寸の腰高丸鉢の切足のもので、鉢の高さと鉢縁の調和という点で非常に美的研究され尽くしたものであつた。

## 〔鉢植付け法と実生改良〕

鉢植えによる周年栽培が確立して行く段階で、花が終わると同時に株分け、植替えを行うという花菖蒲の生育上、もつとも適した管理方法も自ずと確立したと想像される。株分けは株に附着している古土を落として、花の済んだ古茎を根際から切り除く作業から

始まる。次に、花茎の付いていた古い根茎を両脇の新芽それぞれにつけて切り離す。重要なのはこうして切り分けた新芽の鉢への植え方にある。新芽一つから翌年に一茎が立つが、素人目からは一鉢に沢山花を着けた方が賑やかでよいと思いがちではある。しかし熊本式では一鉢に一花、または二花咲きとするのが品位ある咲かせ方であるとされる。更に、室内陳列用として、むやみに花茎が長幹となるものは捨てられ、花の位置が襖の引手より三寸上となるよう品種改良が加えられた。これは平均的な背丈の日本人が正座する眼の高さに合致するものである。

## 〔陳列の仕方〕

熊本花菖蒲の観賞の第一はその陳列の仕方にあるとされるが、当然ながら日本建築の客間である床の間を中心とした精神世界の伝統に基づいている。

ア. 床花の選定：床の間を飾る花は、なるべく丈の低い正花(花形変化の少ない品種)を用いる。床の間は幅物(掛軸)を主位とし、花はその取合せとするものであるから、最上等の花は床花としては差し控える。また、自分の新花と他人の新花とが同時に咲いた場合は、他人のものを床花とし、自分

の新花は床の次以下に陳列する。なお、幅物は花菖蒲に因むものを使用し、香炉、香入等は茶の湯法による。

イ. 座敷数による分別：まず、長幹物（花茎の高い品種）と短幹物（低い品種）とに分け、さらに花色を区別する。陳列場所となる座敷が複数ある場合には、広い方に丈揃のよいものを、狭い方に丈揃の少ないものを陳列する。

ウ. 鉢の受持ち：これは陳列上の重大要件である。花の高低の位置は、家の柱の配置と同一の心得とすべきで、花茎の一番高いものより二、三本を本柱と定める。次に高いもの二、三本を間柱とし、残ったものを裝飾用と定めて座敷の広さと鉢数によりその位置を決める。

エ. 鉢の配り方：鉢数に応じて敷板を行儀正しく並べて、その上に水盤（八寸角の深さ一寸二分の垂鉛板）を置き、それらに鉢を配する。鉢の配り方は、幹高きもの二鉢を両隅の柱の前に、三番目の高きものをその中央に、四番、五番のものを一番と三番の間、または二番と三番の中間に取る。これらを本柱と間柱の配置とするが、残ったものは色彩の調和と花輪の取合せと

考えて適宜、配置する。

オ. 花の取合せ：花色を四方に調和するように気を配り、前日咲いたものと当日咲いたもの、大花と小花とを交互に並べ、しかも色彩の偏らないように色花と白花とを交互に配置する。この色配りの心持は一番多い同色の花を三方若しくは四方に配り、二番の色を両方に引き離し残りの色をその間に並べるのである。

カ. 受け花の気配り：他人の新花を貰ううけ、或は試作を依頼され、または是非にと所望した花がある時、その花は買入れ品と同視せず貴重に、且つ優秀に見えるように陳列に心を用いる。例えば他にそれ以上の花があつても、受けた花を上位に置き、それより出来る限り距離を置いて自身の上花を配列し、受けた花にはその両側にその日の開き花、若しくは劣花を配り、花の品位と働きを引き立たせる。これに反して自身の上花はそれより見劣りするよう両側に可也上花を配り目立たないよう、兎にも角にも客を上席に置くという意味を忘れないよう心得るべきである。

キ. 正面見定め：以上述べた心得を以つて花を配列しても、陳列した花

が右向、左向、仰向等々、思い思いに花が正面の方向に咲いていない時は、行儀を乱し折角の心遣りも徒勞に終わることとなる。それで総ての花を客席本位に花の正面を向け置く必要がある。この正面は花の何方を以つて正面と定めるかというと、花には三英咲、六英咲、八重咲の三通りの花形があるが、何れにしても一番弁の開いた所が概して正面となる。また確実な定め方としては、芯（雌しべ）の傾き行儀よく見える所を正面とするのが一層見定め易いものである。尤も花弁の垂れ方の最長の方が正面となるが、只それだけでは心が片寄つて見えたり、不規律に見えたりすることがあるので、心が正形に見える垂弁を正面にするか、或は両垂弁の中間（六英咲であれば上英）を正面と定める等、花形が丸く見える様に正面定めをするものである。

以上は熊本の満月会で行われた花菖蒲陳列方式の一例であるが、紙面の関係で、今回は栽培方法については、ほとんど触れなかつた。しかし、熊本花菖蒲を音楽に例えるなら、作曲（育種）、作詞（品種命名）、演奏（栽培）、鑑賞（陳列）のすべてが、一連のセットとして確立されていることが分る。花菖蒲を極めて主観的に捉えており、目を閉じて外界との接触を絶

ち、己が意識を内省へと向かわせ、そこに selfless manner を引き合いに出している点は、茶道に相通じるものがある。やはり、長い平和な島国ならではの園芸であろう。

なお、英国のオーリキュラ展示写真を以前に見たことがあるが、直感的に同レベルのものを感じたのは考え過ぎであろうか。

なお、本稿の内、「鉢栽培の歴史」→「陳列の仕方」の内容については、石井勇義著「牡丹花菖蒲の作り方」P 176〜P 199 1930年誠文堂を修正引用した。